

8 芸術と文学

小樽には、絵画や写真で表わしたくなるような美しい情景や構図が多い。運河、歴史的建造物、海、山、花、坂道、絶景、行事などにおける様々な構図を捉える芸術や、自然や風物の色合い、印象などを表した工芸などに、土地ならではの美を見ることができる。石狩湾の海の色、美しい花の色、樹木の新緑、山の紅葉の色、輝く夜景の色、きらめく雪の色などには、芸術家なら表わしたくなるであろう印象深い美しさがある。

「芸術に 写す小樽の 美しさ」

小樽の絵画や美術には、土地に息づく自然、人間、文化を題材にしたものが多く見られる。時代背景が端的に表れたものや、いつの時代にも感じられる普遍的な要素が表れたものなど、作品の描かれ方は多種多様である。アトリエの開放や美術団体の設立も積極的に行われ画家たちは相互の交流を深め、お互いに刺激や影響をし合ってきた。結婚して上京した後も題材を求め、頻繁に帰郷した中村善策(明治34～昭和58)の風景画などには、小樽の自然からの大きな影響が感じられる。

斎藤吉朗による彫刻「カモメを呼ぶ少女」も、自然と調和した無垢な少女の姿を見事に写し出し、実存的な存在感とそれをつくった吉朗の温かいまなざしが感じられる印象的な作品である。

新進気鋭のガラス工芸作家の作品には、大量生産では生み出すことのできない奥深さがある。機械でつくったものには、数字で表せるような規則的な成り立ちが生まれるが、手作りのものは、つくる人の手の加減でいかようにも変わりうる。その加減に面白みや繊細さ、瞬間的に起こり得る偶然、作家の意図などが反映されている。機械に頼らず人の手で作ったものは、二つとない、まさに世界にひとつだけの作品に仕上がる。作家は作品に自分自身の生き方や人生観、希望、夢、愛情など、様々な哲学や感情を投影させる。作品はそうしたものを写す媒体となり、見たり買ったりする人たちに美や優しさ、示唆やメッセージなどを与えてくれる。

小樽には、視覚教材のような歴史的建造物、美術館、ギャラリー、体験工房、彫刻が設置された屋外など、芸術を見たり、触れたり、研究したりする環境が整っている。

ゆかりのある文学者の文学碑も、公園や神社、展望台など、小樽市内の景観の良いところに建っている。日本が誇る在りし日の文学者たちが何を思い、考えてきたかなど、散歩をしながら考える機会を小樽は与えてくれる。小樽市内の図書館や文学館で関係資料を閲覧することも、ゆとりある小樽滞在の大きな楽しみとなる。彼らの学びや仕事、彼らが見、描いたものについて調べ、関わりのある場所を訪れると、作家や作品についての理解を深めることができる。

見事に才能を開花させた石川啄木、小林多喜二、伊藤整。彼らは豪商たちの絢爛豪華な暮

しぶりと労働者たちの低い生活水準の両方を目の当たりにした。彼らに共通しているのは、社会に対する強い疑問と小樽を思う気持ち。作品や当時の小樽や日本の社会状況からして、人間を描く文学者たちの間に、非常に複雑な感情があったことが伺える。社会に対する疑問と小樽を思う気持ちは、一見、あまり関係のないもののようにも見えるが、非常に深い関係にある。社会に対する疑問が小樽への思いを強め、小樽への思いの強さが社会に対する疑問を強めた。このように、作家や作品に影響した様々なことを探っていくことで、興味深い発見や楽しみを得ることができる。どのような題材を扱うにせよ、小樽の文学研究には、当時の時代や社会状況を知るための歴史認識が不可欠になる。それらを知る手掛かりとなるものが多く存在するという点で、小樽という現場で研究をしない手はない。

「小樽には 文学想える 人の影」



小林多喜二文学碑
(写真提供・小樽ジャーナル)